

Title	交易港と異文化空間：長崎港の機能と解釈
Sub Title	Ports of trade and cross-cultural space : the function and interpretation of Nagasaki port, Japan
Author	織田, 竜也(Oda, Tatsuya)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.119 (2008. 3) ,p.147- 170
JaLC DOI	
Abstract	<p>This paper considers "Ports of Trade" by Karl Polanyi from some theoretical viewpoints and the case of Nagasaki, Japan. Ports of Trade are not just more ports in which trades are done. It is their feature that the power of hinterland take political control of the ports, as a result, the ports are kept neutral and safety in transactions. The space of the ports is ambiguous, that is to say, the ports belong territorially to hinterland, at the same time, they are alien territory. There are many ports which are defined "Ports of Trade" all over the world. In Japan, Nagasaki is the most suits. Especially Dejima at Nagasaki is landfill construction in 1634. So in this paper, first we learn the Nagasaki Port historically. After that, we consider the cross-cultural situation. Especially we check the event that the elephant from Southeast Asia reached at the port of Nagasaki and walked to Tokyo. People believe the power of the elephant from the folk religious viewpoint. This case show clearly that "Ports of Trade" is deeply related cross-cultural situation, and is the contact point of cross-cultural interpretation. So we need consider "Ports of Trade" from the cross-cultural standpoint, not only economically but also culturally.</p>
Notes	特集文化人類学の現代的課題II 第1部 空間の表象 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000119-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投稿論文 —

交易港と異文化空間

——長崎港の機能と解釈——

—— 織 田 竜 也* ——

Ports of Trade and Cross-Cultural Space: The Function and Interpretation of Nagasaki Port, Japan

Tatsuya Oda

This paper considers “Ports of Trade” by Karl Polanyi from some theoretical viewpoints and the case of Nagasaki, Japan. Ports of Trade are not just more ports in which trades are done. It is their feature that the power of hinterland take political control of the ports, as a result, the ports are kept neutral and safety in transactions. The space of the ports is ambiguous, that is to say, the ports belong territorially to hinterland, at the same time, they are alien territory. There are many ports which are defined “Ports of Trade” all over the world. In Japan, Nagasaki is the most suits. Especially Dejima at Nagasaki is land-fill construction in 1634. So in this paper, first we learn the Nagasaki Port historically. After that, we consider the cross-cultural situation. Especially we check the event that the elephant from Southeast Asia reached at the port of Nagasaki and walked to Tokyo. People believe the power of the elephant from the folk religious viewpoint. This case show clearly that “Ports of Trade” is deeply related cross-cultural situation, and is the contact point of cross-cultural interpretation. So we need consider

* 東京大学空間情報科学研究センター科学技術振興特任研究員

“Ports of Trade” from the cross-cultural standpoint, not only economically but also culturally.

Key words: ports of trade, dejima, elephant, folk religion

1. はじめに

本稿は、対外交易の港として400年以上の歴史を有する長崎を、経済人類学における交易港の事例として再考する。とりわけ交易港の内部/外部を往還する物や情報に着目し、その特徴を明らかにする。異なる世界観をもつ集団同士が接触する場合、外部から流入した情報は独自に解釈されて、内部に定着することがある。つまり異文化との接触は世界観を変容させる可能性がある。交易港が政治的に制御されるのは、このような傾向と無縁ではない。はじめに交易港に関する理論的な整理を行った上で、長崎を交易港として検討する意義を明確にする。次に長崎の歴史的沿革を確認し、交易港としての機能を検討する。最後に長崎港の空間的境界を確認し、そこで流入/流出する物や情報の性質を事例を検討することで考察する。

2. 交易港 (Ports of Trade)

カール・ポランニーによる経済史研究の重要な成果は、交換現象を原理的に類型化し、個別の相違を明確に示したことにあった。「互酬/再分配/交換」といった「統合形態 (forms of integration)」は、その後の研究に強い影響力を持った。また共同体の内部/外部を峻別する観点から、「沈黙交易 (Silent trade)」や「交易港 (Ports of trade)」などが焦点化されたことも重要である。とりわけ本稿で考察する交易港について、ポランニーは次のように説明する。

交易港は多くの場合、中立的な装置である。沈黙交易から派生したも

の、先史時代に地中海でみられた低い壁に囲まれた商業都市 (*emporium*), 海に開かれた場所, 中立的な沿岸の都市である [Polanyi 1963: 30].

交易港は国際市場の確立を促した海外交易の普遍的な制度であると、われわれは考える [Polanyi 1963: 31].

ポランニーは事例研究として、西アフリカ黄金海岸のウィダにおける、17～19世紀の奴隷交易を考察した。考察のポイントは主として、①交易港の成立過程、②交易港の制御方法、③交易に使用される物財などに向けられた。

考古学者のジョアンナ・ルークは、交易港の類型論を以下のように整理した。まず Step 1 を Case Studies として、交易港を制御する主体によって分類する (表 1)。ルークの整理では “type A 後背地 (hinterland)”, “type B 自治 (autonomous)”, “type C 交易者 (traders)” に区分される。既存の文献研究では, “type A” にはポルトガル時代のスリランカとインドの港, サクソン人のハムウィク, 中世アイルランドの港, 中世バイキングの港, ダホメ支配のウィダ, 18世紀の広東が含まれる。同様に “type B” にはアステカ・マヤの港, ダホメ支配以前のウィダ, 中世のドレストッドとヘーゼビュー, ウガリット, 16世紀のベンテンなど。 “type C” には紀元前二千年紀のアナトリアのアッシリア人, ナウクラティス, 17～19世紀のアジア・アフリカにおけるヨーロッパ人, 19～20世紀の中国における条約港, 現代バンコクにおける華人, 中央メキシコ・オアハカにおけるアステカ・トクテペク, フェニキアの交易コロニーなどが含まれる。

だが “type A” にダホメ支配のウィダ, “type B” にダホメ支配以前のウィダが分類される点など, 議論の余地が残る。栗本慎一郎は交易港の制

表 1 Port of trade type-sites (Luke, 2003, p. 3)

	Political control	Documented examples	Excavated examples
A	Hinterland	Sri Lankan and Indian ports of the Portuguese period; Middle Saxon Hamwic; Medieval Icelandic ports; Medieval Kaupang and Birka; Dehomeen Whydah; 18 th century Canton.	Kaupang; Jewish London
B	Autonomous	Aztec-Mayan ports, e.g. Cozumel, c. 1000 CE–1500 CE; pre-Dahomean Whydah; Medieval Dorestad and Hedeby; LBA Ugarit ⁸ ; 16 th century Banten.	Cozumel; Dorestad and Hedeby; Ugarit; 3 rd –2 nd century BCE Delos.
C	Traders	Second millennium BCE Assyrians in Anatolia ⁹ ; Naukratis; Europeans in East and Africa, 17 th –19 th century CE; European treaty ports in China, 19 th –20 th centuries CE; contemporary Chinese in Bangkok; Aztec Tlaxcala in Oaxaca, Central Mexico; Phoenician trading colonies.	Assyrians in Anatolia; Naukratis; EMII/LMIB Kastri on Kythera; Phoenician trading colonies.

度化に関連して、沈黙交易と交易港の相違を、中立性を制御できる国家 (state)¹⁾ の存在に求めている [栗本 1979: 135–136]。沈黙交易が集団と集団の接触地において自然発生的に行われるのに対して、交易港は国家の登場による政治的制御によって制度化する。この区分は集団の統合形態として提唱された「互酬」と「再分配」の相違にも対応する。

ルークは Step 2 として、Behavioral characteristics から交易港を類型化する。分類の小項目として「制度化 (Institutionalisation)」「輸入の制御 (Control of imports)」「交易用語 (Terms of trade)」「港の位置 (Port location)」「港における交易者の自由 (Freedom of traders in port)」

があげられる。

ここではそれぞれの type について、「制度化」と「輸入の制御」について確認しておこう。「type A」の制度化の項目では、「後背地によって制度化された港では、輸入品の損失から生ずる指導力の危機を避けるために、輸入品が間違いなく安定的に供給されることが重視される (Luke, 2003, p. 5)」といった説明がなされる。そのような事態を想定することは絶対にあり得ないとはいえないものの、あまりにも断定的・限定的な印象を受ける。

たしかにポランニーは交易港の政治的制御に関して、港の政治的中立性を指摘した。そこで活動する交易主体の生命や身体の保証がなされなければ、交易港が制度化されることが困難だからである。だが集団の取引を「取り仕切る」政治力は、必ずしも輸入品の円滑な分配に依存するものではなかろう。理論的な仮説としては、後背地の権力には支配領域の「内部/外部」にまたがって君臨する力、あるいは交流する特権が求められ、そのことが結果的に、「内部」の支配を強化すると考えておこう。

“type A”の輸入の制御の項目では、「輸入には後背地のリーダーが介入し、必需品の分配を通じて地位を制御する。それはエリートが所持する輸入された奢侈品の分配を陳列・剥奪・選択することによってである。」[Luke 2003: 5]と説明される。やはりここでも説明は政治力の「内部」が問題とされるが、何を輸入する/しないのか、あるいは輸入を禁ずるのかといった選別がより重要である。

“type B”の制度化の項目では、「制度化に際して特別な活動は必要とされず、異文化の交換ネットワークにおける接点において、自然発生的に浮上する。」[Luke 2003: 6]とされ、輸入の制御の項目では、「地域の取引と長距離取引を区別する必要はない。交換は交易者の間で、また交易者と居住者の間で行われる。」[Luke 2003: 6]と説明される。このように概念化してしまえば、交易港の理論的重要性が薄らいでしまう。ルークの説

明では“type B”で想定される交易は単なる地域市場であって、交易港の概念設定によって集団の「内部/外部」が理論的に可視のものとなるという、ポランニーの射程が効力を失ってしまう。

“type C”の制度化の項目では、「永住的な移民の意味合いが強くなり、個別のケースで制度化の行動が要求される。結果的に専門的な機能に特化して計画された港ということになる。」[Luke 2003: 7]とされ、輸入の制御の項目では、「港は交易コミュニティによって設定・制御される。経済的に未開発の地域において資源開発を行うのが典型例である。」[Luke 2003: 7]と説明される。ここでもルークはポランニーの議論を消化していない。ポランニーは交易港の住人について、アンリ・ピレンヌの示したポルトゥス (*Portus*) と比較して、以下のように論じている。

ピレンヌのいうポルトゥスの交易者は、ポルトゥスの居住者になる。一方われわれの交易港では、居住者は先住民 (natives) であり、異人 (stranger) ではない [Polanyi 1963: 36]。

ポランニーの概念設定では、交易港は異なった二つの政治的勢力の結節点という意味がある。そこで交易者とは、両勢力を媒介する両義的な存在として捉えられるべきなのである。したがって理論的には居住者の性質に拘泥することはないが、交易者の性質に着目することは重要である。付言すれば、交易者は外交使節や使者とも重なり合う可能性がある点には注意を払わなくてはならない。

さらにルークは Step 2 と同一の項目を含む Material characteristics を Step 3 として検討する。Step 2 同様に「制度化」と「輸入の制御」の項目を確認しておこう。“type A”の制度化の項目では、「制度化以前の段階では、その港でみつかれる物財ではなく、それ以前に後背地に輸入された物財で象徴される。」[Luke 2003: 8]とされ、輸入の制御では「後背地

では輸入品は中心地に集められる。政治経済階層の頂点となる中心地は輸入品の大半を吸収し、展示・貯蔵する。輸入品は中心地に従属する下位集団に分配され、そこでも顕示的に展示・貯蔵される。交易管理の焦点となる威信財は港に置かれる。港自体は物質的には貧しく、交易される物財が供託されることはない。」[Luke 2003: 8]と説明される。

“type B”の制度化の項目では、「後背地における輸入品から、期間限定的な港の存在を想定することもできなくはないが、制度化された常設の港だけが有形である。」[Luke 2003: 9]とされ、輸入の制御では「港において地産品と輸入品を物質的に区別する必要はないので、輸入品は地域全体に分配される。」[Luke 2003: 8]と説明される。

“type C”の制度化の項目では、「港は熟慮の末に制度化されるので、入念な計画の証拠が存在する傾向にある。(Luke, 2003, p. 9)」とされ、輸入の制御では「輸入品が後背地もしくは後背地の取引先に還流するように後背地は制御を行う。港自体は初期には栄えない。(Luke, 2003, p. 9)」と説明される。

こうしてみると、ポランニーの概念としての交易港は、ルークの分類では“type A”だけが該当するようである。個別の項目を確認していくと、“type B”は地域市場、“type C”はコロニアル状況における資源開発地が想定されている。しかしながら“type B”や“type C”においても、果たして単なる地域市場として概念化してよいケースなのか、交易者の集団が政治的制御を行うとしても、そこにはやはり後背地や帝国の意思が反映されるのではないかといった疑問が生ずる。

例えばルークが“type B”に分類するアステカ-マヤの交易港については、アン・チャップマンによる“Port of Trade Enclaves in Aztec and Maya Civilizations.”を踏まえたものであろう²⁾。アステカ-マヤの経済ネットワークを考察する場合に、交易港の概念を導入する有効性を主張するものである[Chapman 1957]³⁾。たしかにそこで示された事例は複数の

解釈の可能性を促す。しかしながらルークの整理では、せっかくチャップマンが「飛び地 (enclave)」と表現した問題を、単なる地域市場の議論に摩り替えてしまう危険性がある。つまり交易港という概念の名称を使用するものの、交易港概念を設定する研究上の意義を十分に踏まえていないために、不十分な整理になってしまっていると考えられる。したがって結論としては、ルークによる交易港の分類には重要な意義を見出すことは難しいと言わざるを得ない。

以上、交易港をめぐるルークの議論を批判的に検討することで明らかになったのは、交易港概念を設定する研究上の意義を再確認することの重要性である。政治的制御の内実、物や情報の出入りを制御する点にあり、その内容は個別に検討されることが求められる。そこでは特に、人類学的な研究手法が用いられる必要があるだろう⁴⁾。交易港は内部と外部を峻別する装置であり、制度化された境界である。したがって交易港概念を設定することで、集団の制度的・観念的・空間的境界を明確にする手がかりを発見することができるはずである。本稿では以下、日本における交易港の事例として長崎をとりあげ、その成立を概略的に粗描しながら検討を加え、特に交易港を境界として発見される「内部/外部」の問題を個別の事例から考察する。

3. 交易港としての長崎

中世日本の港と唐人町について考察した森勝彦によれば、『籌海図編』や『日本一鑑』などの資料にみられる九州地方の港の数は100を超える[森 2001]。だが全ての港が交易を行っているからといって、すぐさま「交易港」と概念化されるべきではない。両資料は16世紀中頃に勢力を拡大した倭寇への対応を目的とした明朝の書物であり、そこに記載された港はいわば、15～16世紀に発展した倭寇の拠点と考えることができる。

当時最大級の倭寇勢力を率いた王直は、平戸を拠点の一つとしていた。

平戸の領主である松浦氏の協力があったのである。1543年に種子島に鉄砲を伝え、前後して明朝との公的な交易を拒絶されたポルトガルは、1550年に初めて平戸に入港する。王直の勢力は平戸領主である松浦氏とポルトガル人を繋ぐ役割を果たしたと考えられている〔中島 2005〕。だが王直は1559年に明朝に謀殺され、次第に倭寇の活動は縮小していく。

倭寇勢力は明朝や室町幕府といった中央の国家的勢力に対して、周辺に位置づけられる存在である。この時期に九州で機能した港は、明朝とも室町幕府とも直接的には関係がないと考えられる。この時期の交易は一般的に、勘合符の有無によって勘合貿易と密貿易に区分される。勘合とは明朝から発行される証明であって、寧波の乱（1523年）に集約されるように限定された外交的特権である。だが勘合船以外の船の活動を密貿易と概念化するのは妥当ではない。明朝における交易港の設定という観点から情報を整理する必要が求められる⁵⁾。

倭寇勢力の拠点として多くの船が渡来していた平戸では、初来航以降1550年代には数十人のポルトガル人が滞在していた。しかしながら1561年、取引の紛争を契機として14人のポルトガル人が殺傷される事件が起こる（宮の前事件）。松浦氏と勢力を争っていた大村氏はこの機会を捉え、同年中に自領の横瀬浦に港を整え、ポルトガル船を招いた〔外山 1998〕。領主大村純忠はただちに洗礼を受け、領内の寺社を破壊するなど、急速にカトリック世界へ傾倒した。これに反対する勢力が横瀬浦を焼き討ちしたことから、福田や島原の口之津を経て、1571年に純忠は長崎に港を築いた。

以上が長崎港開港までの概略である。この時代の特徴は人類学的には「ファースト・コンタクト」の問題として捉えられる。ポルトガルが日本と接触するに際して倭寇が関与している点が興味深い。ポルトガルの拠点が平戸から長崎へと移動した直接的な原因は1561年の宮の前事件にあるようだが、異文化接触の過程においては、その目的が交易であれ布教であ

れ、生命や身体の危険は当然のごとく発生する。したがって恒常的な交易に伴う交易港の設定に際して、何よりもまず生命の安全が保障されなければならない。その保障は政治的な支配力によってなされるため、現地の支配者層との結びつきが不可欠のものとなる。ポランニーの指摘が歴史的事実として確認できよう。さらに支配者層同士の紛争状況も孕みつつ、横瀬浦の港はカトリック化への反発として打撃を受ける。領主大村純忠の行った行動は、既存の社会状況に小さくはない変更を迫るものであって、急激な社会変容を引き止める力が働いたとみることができよう。

すなわちポルトガルと日本との「ファースト・コンタクト」においては、暴力的な場面が出現したことが確認できる。そうした困難を乗り越えつつ、カトリックの洗礼を受けた大村純忠の尽力によって長崎港は開かれた。ポランニーの議論を踏まえれば、長崎港の政治的制御は大村氏によってなされたと判断するのが妥当であろう。

しかしながら、純忠は1580年になると、長崎と茂木をイエズス会に寄進してしまう⁶⁾。土地の提供と教会による金銭の徴収は、日本の中心的勢力にとって看過できない問題となってくる。だが当時、室町幕府は既に崩壊し、織田信長による日本再編事業もまた1582年に中断する。一説にはイエズス会領時代の長崎は、城壁に囲まれて要塞化していたという〔武野1976〕。

本能寺に倒れた信長勢力を継承した豊臣秀吉は九州に軍事侵攻し、キリシタン大名の処遇に対応することとなる。1587年には「伴天連 (pardre) 追放令」が発布され⁷⁾、1588年に長崎は直轄領となる。だが宣教師バリニャーノは生糸の輸入を停止することで秀吉と折衝を行い、追放令は効力を失う。1592年には長崎奉行が設置されて寺沢広高が赴任、城壁は撤去された。

この時期の長崎は、領主の大村氏の管理からイエズス会を経て、秀吉の統治システムに組み込まれていく過程である。異国と日本の境界線として

の長崎は、一旦はイエズス会の所領となるが、秀吉はこれを没収して直轄地にした。いわば長崎は波間の海岸線のように境界を移動させるが、交易港の中立性、両義的性格が空間的に表出する事例であるといえよう。だが中立性が保たれるためには政治的制御が必要となり、より強力な支配力を有する勢力の元で管理・運営されていかななくてはならない。

秀吉の死後、日本は江戸幕府によって一元的な統治が行われるようになるが、将軍徳川家康はオランダ・イギリスとの接触を強める。この動きには1581年にオランダがスペインからの独立を宣言し⁸⁾、1588年にはイギリス艦隊がアルマダの海戦でスペイン無敵艦隊を撃破するなど、ヨーロッパの政治動向が反映している。オランダでは1590年代に入ると多数の船がインドへ向けて出航するようになり、1598年にロッテルダム会社から派遣された5隻のうち、辛うじて航海を続けたリーフデ号だけが1600年に日本に辿りついた。リーフデ号に乗船していたウィリアム・アダムス(William Adams)とヤン・ヨーステン(Jan Joosten van Loodensteijn)は家康に仕えることとなる。オランダで連合東インド会社が創設されるのは1602年である。

家康はポルトガルやオランダをはじめ、諸外国船に「渡来御免の御朱印」を発行した〔行武 2007〕。これを受けてオランダは日本との交易を開始し、1609年には平戸に商館を設立する⁹⁾。1613年にはイギリスも平戸に商館を設置するが、オランダとイギリスは1619年に同盟を結び、スペイン・ポルトガル勢力と対抗していく。平戸はアジア海域におけるオランダの戦略拠点として、物資や日本人兵士の供給基地として利用された。長崎とポルトガルとの関係では、1609年にマカオで有馬晴信の配下とポルトガル人が戦闘になり、晴信は報復のため1610年に長崎湾でポルトガル船を包囲・撃沈した(マードレ・デ・デウス号事件)。

この時期はヨーロッパの国際状況とも対応して、長崎港と結んだポルトガルに対して、オランダ・イギリスは平戸に拠点をおいた。アジア海域で

の勢力拡大に伴い、オランダが幕府との関係を強くする過程である。家康は1614年になるとキリシタン禁教令を日本全国に拡大し、スペイン・ポルトガルの宣教師を国外に追放する。また1615年にはオランダに対して、朱印状不携帯のスペイン・ポルトガル船の捕獲を容認する〔行武2007〕。交易港は平戸・長崎に制限されるようになるが、オランダはイギリスとの勢力争いにも勝利し¹⁰⁾、イギリスは1623年に平戸商館を閉鎖、1624年にはスペイン船の来航が禁止される。

幕府はカトリックへの対応を硬化し、1635年には海外居住の日本人の帰国を禁止、1636年には長崎に出島を築造してポルトガル人を移動させた。だが1637年の島原の乱を契機として、1639年にはポルトガル船の来航が禁止される。この状況は一般に「鎖国体制の完成」と表現されるが、交易港の観点からみると、アジア海域におけるオランダ勢力の拡大に伴って幕府とオランダの関係が強化され、平戸・長崎に限定された対ヨーロッパ勢力との交易が、オランダ単独による出島に絞り込まれた過程であるとみなすことができよう。

港を通じて物や情報が流入/流出する場合、「交易港」という概念設定を行うことで、集団の「内部/外部」を理論的に見出すことが可能となる。さらには相互の交通による「内部」の状況を明らかにすることで、文化と経済を繋いだ人類学的考察の一例を示すことが可能になる。続いては長崎を交易港として考察するための認識論的諸問題を確認する。

4. 交易港を認識する

概略的に長崎港の沿革を確認したが、鎖国体制とはすなわち、交易港を設定することによって異国との境界を明確にし、物や情報の流入/流出を制御するシステムを意味する。スペイン・ポルトガル勢力はカトリックの布教の影響もあって、結果的に交流が絶たれることになる。だがイギリスとの接触も次第に弱くなっていくことを考慮すれば、アジア海域における

オランダ勢力の拡大が「鎖国」と呼ばれるような国際交流を可能にした面も否定できない。

近年、鎖国期にはオランダや清との交流ばかりでなく、対馬や琉球を介した対外交流が活発だったという認識が一般化しつつある。その前提には鎖国概念の再考があり、荒野泰典の研究などを中心に多くの研究がある[荒野 1988]。そもそも「鎖国」という概念は、エンゲルベルト・ケンプファー (Engelbert Kaempfer) による『日本誌』¹¹⁾ の訳出に際して、阿蘭陀通詞の志筑忠雄が 1801 年に創造した概念である。本稿の提案する認識論では、「国を開く/閉じる」といった問題はむしろ、交易港の設置に伴う派生的な現象であると判断すべきである。なぜなら交易港を日本の境界として管理・運営することは、ポランニーのいう「古代的経済 (archaic economy)¹²⁾」における国家 (state) の基本的機能だからである。

交易港を設置する主要な目的として、交易による利益の独占などが想定されることもある。だがそれは二次的な結果である。より重要な機能は、内部を破壊する危険性をもつ外部に対して接触面を空間的に限定することで、物や情報の流入/流出を制御するといった、世界観の防衛にあるだろう。長崎のほかにも対馬 (朝鮮)、薩摩 (琉球)、松前 (アイヌ) で交易が行われたように、幕府はその空間的境界に交易港を設定し、直接・間接的に制御を行ったのである。

出島は埋め立てによって築かれた人口の島であり、その独特な扇形の空間は周囲を海で囲まれていた¹³⁾。日本の内部でありながらオランダ人が暮らす外部でもある両義的な空間では、日本人の出入りが禁止されていた。宮永孝はケンプファーの『日本誌』に描かれた出島の記述を検討しつつ、出島の入り口に立てられた立て札を紹介する。そこに書かれていたのは次のような文言である [宮永 1986: 18]。

禁制

- 一、傾城之外女人入事
 - 一、高野ひし里之外出家山伏入事
 - 一、諸勸進之者並乞食入事
 - 一、出島廻り榜示杭之内船乗廻事
附り橋之下船乗通事
 - 一、断なくして阿蘭陀人出島より外に出事
- 右之条々堅可相守者也

傾城^{けいせい}とは遊女の別称である。日本人の出入りが禁止されていた出島に入ることができたのは、長崎奉行などの幕府関係者をはじめ、乙名（おとな）と呼ばれた役人と高野聖、そして丸山の遊女であった。宮本由紀子によれば、1642年に丸山遊郭がつくられた目的は外国人を相手とすることであり、丸山の遊女には日本行/唐人行/阿蘭陀行の区別があったという[宮本 1984: 20]。

一般的な言説として用いられる「オランダや中国との貿易」といった表現についても一言触れておきたい。当時の中国は明朝から清朝への移行期にあった。幕府は清朝と公的な交易関係を結んでいないので、いわゆる「唐船」とか「唐人貿易」と呼ばれるものは、地域概念としての中国・シャム・ジャワ・パタニなどの東アジア・東南アジア地域からの船を総称するものなのである。本稿が「貿易」という言葉を用いずに「交易」を使用するのは、「国家と国家の通商」といったニュアンスを排する目的も含んでいる。

長崎港における交易については膨大な研究の蓄積がある。本稿の関心から注目されるのは、長崎の場合には交易港の制御に際して、空間的な境界がきわめて明確に決定された点である。その空間とは周知のとおり、出島と唐人屋敷である。出島は埋め立てによって出現した海に浮かぶ空間であ

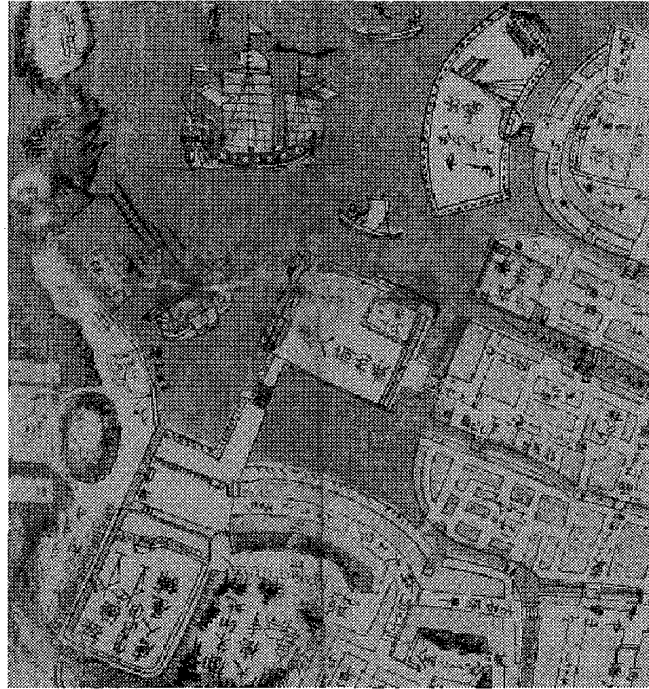


図1 出島と唐人屋敷（『肥前長崎図』，1801年，部分）

り，長崎とは一本の橋で接続されていた．人造の交易港としては世界的にも珍しい事例ではないだろうか．また唐人屋敷は海に面した陸地に設定されるが，周囲は堀と塀で囲まれ，閉鎖的な空間として成立する．また新地と呼ばれるのは唐人交易のための倉庫として使用された場所で，これも埋め立てによって築造された空間である．

つまり，長崎を交易港として考察するにあたり，具体的な交易空間を焦点化すると，周囲を海に囲まれた出島と，堀と塀に囲まれた唐人屋敷がクローズアップされる．まさに出島と唐人屋敷は異国にとっては日本の「内部」でありながら，日本にとっては「外部」となる両義的空間であり，それを制御するためには交易港において人間・物・情報の流入／流出を厳重にチェックする必要が生ずる．

交易品についての研究をみると，輸入品として生糸が大量に流入したことがわかる．1655年まで行われていた「糸割符（パンカド）¹⁴⁾」のような物資の一括取引も交易港制御の一手法である．しかしながら交易品の解

釈や象徴性といった人類学的な観点からは、生糸は衣類の原材料として使用されたに過ぎない¹⁵⁾。そこで本稿では視点を変えて、交易品目や交易量、貨幣価値に関わる金・銀・銅の流出量など、既存研究が注目してきた問題設定からは距離をおいて、より象徴的な次元に関わる事例を扱うこととする。将軍吉宗の依頼によって日本に持ち込まれた象について考察する。

5. 異文化としての象

古代から幕末までに日本に渡来した動物を時系列で紹介した磯野直秀によれば、1408年に南蛮船¹⁶⁾によって若狭国にはじめて象が渡来した（磯野、2007）。その後1575年には臼杵の大友宗麟も象を受け取っているが、1597年にはルソン総督（スペイン）から秀吉に、1602年には交趾国から家康に象が贈られている。1726年には将軍吉宗が呉子明に対して象を連れてくるように命じ、結果1728年に鄭大威によって雌雄一対の象が長崎に到着する¹⁷⁾。

長崎到着から三ヵ月後に牝象は死亡、牡象は1729年3月、陸路を江戸に向けて出発する。磯野は各種文献から象の行程を再現しているので表にしておく〔磯野 2007: 59〕。4月に朝廷に参内した際には「従四位広南白

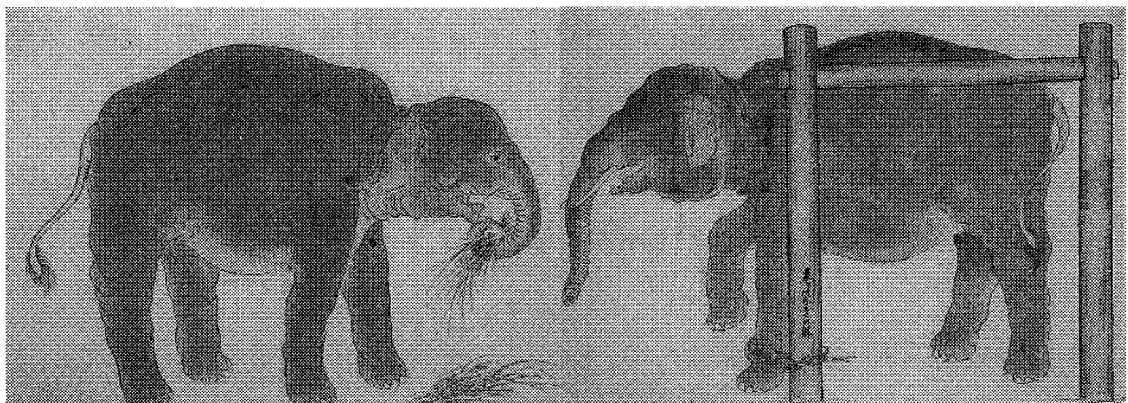


図2 1728年に渡来した牡（右）と牝（左）の象
（『舶来鳥獣図誌』 pp. 64-65）

表2 長崎から江戸までの象の行程（磯野，2007 から作成）

3月13日	長崎発	28日	天皇に拝謁
14日	矢上泊	29日	京都発・草津泊
21日	下関	5月 4日	清須泊
4月 6日	広島通過	5日	名古屋通過
18日	兵庫泊	14日	箱根着
19日	尼崎泊		発病
20日	大坂泊	19日	箱根発
24日	大坂発・枚方泊	23日	川崎泊
25日	伏見泊	24日	品川泊
26日	京都着	25日	江戸着

象」という官位を受けている。吉宗は江戸城でこの牡象を観賞し、その後は浜御殿で飼育される。

交易港を介して異国から越境した象は、日本の支配の最上層となる天皇と将軍に拝謁することとなる。オランダ商館長の江戸参府（1609年～



図3 朝廷での象（『享保14年渡来象の図』国立博物館蔵）

1850 年), 朝鮮通信使 (1607 年再開～1811 年), 琉球使節の江戸上り (1634 年～1850 年) などと並んで考察されるべきであろう。だが例えばオランダ商館長の江戸参府に際しては, 道中は日本人との接触が厳しく禁じられていたのとは異なり, 1733 年には中野村源助・柏木村弥兵衛・押立村平右衛門が浜御殿から象を借り出すことに成功, 見世物の対象として活躍している [磯野 2007: 45]。最後はこの中野村源助に引き取られ, 1742 年に死亡する。

見世物の起源は室町期に遡るとされるが定かではない。江戸期には動物見世物が各地で行われており, とりわけ 18 世紀以降は人気となる。見世物研究者の川添裕は次のように説明する。

近世後期の動物見世物の中心は, 長崎へ渡来したゾウ, ヒクイドリ, ラクダ, ヒョウ, トラといった, 当時のひとびとがみたことのない珍しい舶来動物を見せることにあった。珍しいということはそれだけで価値があり, 見世物の有資格者なのである。最幕末にいたると, 長崎ルートは開港まもない横浜へと移って, 動物舶載のテンポが一段と早くなり, 明治に入るとさらに加速化する傾向がうかがえる。そんな変化はあるものの, 舶来動物の見世物は, 庶民を楽しませ続けた近世後期の見世物の柱のひとつといってよい [川添 2000: 93]。

異文化との接触は刺激的ではあるが故に危険を孕む。だが多くの場合, もともと持っていた意味や位置付けは剥奪され, 受容する側の解釈によって, 収まるべき世界観の内部に配置される。例えばフランシスコ・ザビエル¹⁸⁾によるカトリックの宣教について, 次の岡田章雄の見解は人類学的に説得力がある。

サビエルがはじめて薩摩でその教を説いて, その地の領主をはじめ,

多くの領民の信仰を集めることができたのは、一つには天竺から来た新しい仏教の宗派という、それを受入れる側の錯覚によるところが多かったと思われる〔岡田 1966: 27〕。

これは必ずしも岡田の想像ではない。それを裏付ける資料として岡田は、ゼウスが大日と翻訳されたことや、周防で1552年に教会の建築を許可した大内義長が「西国より来朝の僧」「仏法紹隆」などの文言でカトリックの宣教を理解している事実をあげている（岡田, 1966, p. 27）。このような異文化理解は決して珍しいものではなく、世界各地でみられるものである。したがってこうした認識を「錯覚」と呼ぶのは厳密に言えば正しくない。多元的世界観を前提とした説明をするならば、解釈の組み換えによる意味の変容が発生していると捉えるのが望ましいだろう。そこで異国から渡来した象だが、日本に存在しない動物の解釈をどのように行ったのか、興味の沸く問題である。川添によれば「象を見ること」が、「悪病払い」や「招福財宝」といった効果をもたらすと考えられたようである。

近世後期の動物見世物では、まずは舶来動物の珍しさ、ありがたさを基点にしながら、この時代なりの異国イメージの演出と、舶来知識の吸収がおこなわれる。しかし、その一方で、在来の民俗や力は根強く、「有り難い」となればそれがなじみの参照枠として利用され、悪病払い、疱瘡除け、七難即滅、夫婦和合、招福財宝といった伝統習俗が、次々と動因されていく。結果としてそこには、舶来文化と民俗信仰の両様を含み込む、当時のひとびとの見知らぬものに対する「よろこびと畏怖」の心性を缶詰にしたような、不思議な習合パワーの場が出来上がり、それが大規模な遊びの場として、またぐっとくだけた信心の場として、広範な社会層をひきつけるのである〔川添 2000: 123〕。

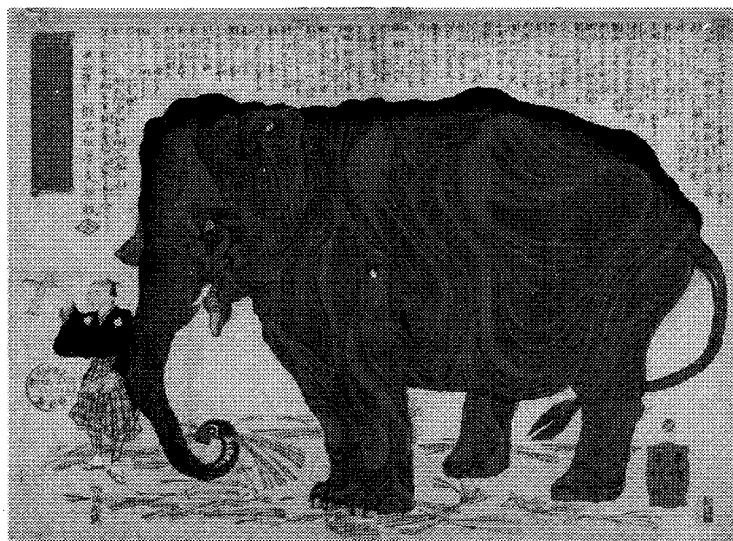


図4 象の見世物（横浜市立図書館）

ここでは海外の詳細な情報は要求されない。日本の外部として出現する「異界」は物理的な空間としてではなく、観念的に想像される空間として成立するのである。したがって想像された「異界」は日本の内部の認識世界で再編成され、独自の解釈が行われる。川添のいう「なじみの参照枠」とはこのことである。

解釈を促す力の源泉は外部に起因するのだが、その結びつきは決して合理的なものではない。舶来動物の見世物はどうしたわけか、健康や幸福と結びついている。たしかに川添の指摘するように、その解釈は「なじみの参照枠」、つまり既存の民間信仰に基づくこともある。なぜ象に病気を治す力があるのか、なぜ財を呼び込む力があるのか、そのようなことは誰も問題にしない。

だがそもそも、どうすれば健康でいられるのか、どうすれば幸福でいられるのか、その方法を誰が知っているというのだろう。すなわち健康や幸福を願うほとんどの人間は、その願いを叶える具体的な手段を持っていない。健康や幸福はいわば「異界」の力によって決定される領域である。したがって「異界」からの使者である象がここに接合される可能性を有する

のである。交易港を介して流入した外部に触れることで、人々は内部の願望を活性化しつつ、その願いが「異界」に届くことを期待するのである。

6. 結 語

本稿では交易港の観点から長崎港を考察した。はじめに港の沿革を確認して交易港としての機能を確認した。次に交易港概念の有効性を検討しつつ、認識論的な諸問題に触れた。最後にベトナムから渡来した象を事例として、異文化空間の解釈について考察した。

確認できた事項をまとめれば、①交易港概念は異文化の境界を明確にする概念装置として有効性を持つ、②交易港の制御には政治力が必要となる、③制御力が弱い場合に交易港は混乱する、④交易港は空間的にも管理される、⑤交易港から流入した物や情報は独自の解釈を付与されて理解される、などをあげることができる。

しかしながら本稿は、国家の境界と世界情勢といった主題の前では、異文化解釈の一例を紹介したにとどまる。交易港を焦点化する重要な事例としては、フェートン号事件（1808年）やシーボルト事件（1828年）などを踏まえて、1858年の各国との修好通商条約の締結までを国際政治史との関連で検討する必要がある。また条約締結以降、各開港場がどのように変容していったのか、空間に刻まれた異文化性を抽出することで考察すべきであろう。そこでは条約港 (Treaty Ports) や外国人居留地 (Foreign Settlement) が問題となる。今後の課題としたい。

注

- 1) 当然のことながら近代の国民国家 (Nation-State) を意味するのではなく、政体に関わりなく政治的制御を可能とする中央権力のことである。
- 2) [Polanyi, Arensberg and Pearson (eds.), 1957] 所収の論文。
- 3) チャップマンは長距離交易と市場とを明確に区別する。
- 4) ここでいう人類学的手法とは、必ずしもフィールドワークを中心に据えたと

いう意味ではなく、集団の価値体系を丹念に解読するという広義の人類学的思考を指す。

- 5) 室町幕府側では九州探題の設置と関連して博多が内部的な拠点となるが、対外的な装置と判断するのは難しい。
- 6) ローマのイエズス会古文書館所蔵のスペイン語資料を丹念に分析した安野眞幸によれば、大村氏はイエズス会に対して「長崎町村」「茂木村」「黒船の船公事」の三者を「知行」として贈与した〔安野 1976: 49〕。
- 7) ポルトガルによる日本人奴隷の交易に対して秀吉が激怒したという解釈は、後に西アフリカ・黄金海岸で行われたイギリス・フランスの奴隷貿易を踏まえれば無視できない〔岡本 1934a, 1934b〕。
- 8) 承認は 1648 年のウェストファリア条約。
- 9) 日本に商館を設立したオランダはこの時期、スペインとの和平交渉の過程にあった。勢力範囲の現状維持を条件とした休戦条約の締結までに通商圏を拡大することが有利と判断されたという〔板沢 1966〕〔行武 2007〕。
- 10) 例えば 1623 年のアンボyna 事件など。
- 11) 原題は *De beschryving van Japan*. または *The History of Japan*. ケンブファーは日本では一般にケンペルとして知られる。死後 1728 年に英訳が出版、後にオランダ語を含めた各国語が出版された。
- 12) ポランニーによる経済の分類「原始的 (primitive)/古代的 (archaic)/近代 (modern)」の用語は、ダルトン編集の (Dalton, 1968) に結実する。
- 13) 現在は埋め立てが進んだ結果、周囲は市街地となり、扇形の輪郭は埋没している。出島を観光資源として利用する長崎市の活動については(織田, 2007)を参照。
- 14) ポルトガル語で *pancada*, 英語で *whole sale*.
- 15) とはいえ、例えば砂糖が交易品として多く持ち込まれた理由は「底荷として最適であったことである。船腹を沈めるのに石を積んではまずい。」〔山脇 1964: 239〕といった記述を読むと、物資への機能主義的な解釈も無視することはできず、今後の課題としておきたい。
- 16) この場合の南蛮船は東南アジアの船を指す。
- 17) 『象志』には「南京人蛮国廣南渡此象ヲ求来レリ」とある。『象志』は上野益三(編)『博物学短編集(上)』に収録。
- 18) 本稿ではザビエルと表記するが、岡田はサビエルとする。ポルトガル語表記は *Xavier* なのでサビエル、シャビエル、ハビエルの方が原音に近い。

参 照 文 献

- 荒野泰典 1988『近世日本と東アジア』東京大学出版会.
- 馬場 誠 1940「長崎會所の研究」『社會經濟史學』9卷11・12号, 社会經濟史学会, 1161-1166.
- Chapman, Anne 1957 Port of Trade Enclaves in Aztec and Maya Civilizations. In K. Polanyi, C. Arensberg and H. Pearson (eds.) *Trade and Market in the Early Empires*. New York: Free Press.
- Dalton, George (ed.) 1968 *Primitive, Archaic and Modern Economies: Essays of Karl Polanyi*. New York: Doubleday & Company.
- 磯野直秀 2007「明治前動物渡来年表」『慶應義塾大学日吉紀要, 自然科学』41号, 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会, 35-66.
- 磯野直秀・内田康夫 1992『舶来鳥獸図誌—唐蘭船持渡鳥獸之図と外国産鳥之図—』八坂書房.
- 板沢武雄 1966『日本とオランダ』至文堂.
- Joanna, Luke 2003 *Ports of Trade: Al Mina and Geometric Greek Pottery in the Levant*. Oxford: Archaeopress.
- 川添 裕 2000『江戸の見世物』岩波新書.
- 栗本慎一郎 1979『經濟人類学』東洋經濟新報社.
- 宮永 孝 1986『阿蘭陀商館物語』筑摩書房.
- 宮本由紀子 1984「丸山遊女の生活—『長崎奉行所判決記録犯科帳』の分析を中心として—」『駒沢史学』31号, 19-46, 駒沢大学史学会.
- 森 勝彦 2001「中世九州の交易港と唐人町」『国際文化学部論集』2卷1号, 鹿児島国際大学国際文化学部.
- 中島楽章 2005「ポルトガル人の日本初来航と東アジア海域交易」『史淵』142号, 九州大学, 33-72.
- 織田竜也 2007「観光資源としての歴史空間—長崎市出島阿蘭商館跡復元整備事業—」『人間と社会の探求』第63号, 慶應義塾大学大学院社会学研究科, pp. 73-85.
- 岡田章雄 1966『キリシタン・バテレン』至文堂.
- 岡本良知 1934a「十六世紀に於ける日本人奴隸問題 (上)」『社會經濟史學』4卷3号, 社会經濟史学会, pp. 247-265.
- 岡本良知 1934b「十六世紀に於ける日本人奴隸問題 (下)」『社會經濟史學』4卷4号, 社会經濟史学会, pp. 372-385.

- 大庭 脩（編）2003『長崎唐館図集成』関西大学出版部.
- Polanyi, Karl 1963 Ports of Trade in Early Societies. *The Journal of Economic History*, Vol. 23, No. 1, pp. 30-45.
- 外山幹夫 1998「松浦氏の領国支配」『長崎大学教育学部社会科学論叢』55号, 長崎大学, 1-18.
- 武野要子 1976「貿易都市長崎の建設と町政組織」『福岡大學商學論叢』21 卷 1 号, 福岡大学研究推進部, 55-72.
- 上野益三（編）1982『博物学短編集（上）』恒和出版.
- 山脇悌二郎 1964『長崎の唐人貿易』吉川弘文館.
- 行武和博 2007「家康政権の対外政策とオランダ船貿易—『平戸商館初期』の日蘭貿易実態（1609～1616年）—」『東京大学史料編纂所研究紀要』17号, 東京大学, pp. 85-104.